

過保護な幼なじみ

一 保護者の幼なじみ

すっかり辺りも暗くなつた午後八時過ぎ。立ち並ぶビルの窓に明かりが灯つている。街路樹や街灯がきれいに整備され、話題のショップも多数並ぶ通りを、家路を急ぐ人たちが足早に駅に向かつていた。

そんな中、とあるビルの案内板の明かりがふつと消えた。そこには『陣内審美歯科クリニック』と書かれている。その真上には、紛らわしいことに『陣内歯科医院』という名前があつた。そちらの案内板の明かりは既に消えており、営業を終了しているのがわかる。

陣内審美歯科クリニックと書かれた磨りガラス状のドアが開いた。そこからこのクリニックで歯科衛生士をしている崎本瑠璃子が、こっそりと顔を覗かせる。きよろきよると周囲を窺っていた瑠璃子は、やがて何かを確信したらしく、ほつとした様子で外に出てきた。

——よかつた、いない。

そんなことを思いながら、瑠璃子はドアに鍵をかける。この陣内審美歯科クリニックの院長である飯田真子と瑠璃子は、長年の付き合いだ。それこそ、瑠璃子がまだ小学生の頃からお互いに知っている。そのため、すっかり信用されていて、鍵も持たされているのだ。

今日、医師であり主婦である真子は、先に帰っていた。

陣内審美歯科クリニックは、歯科医師は真子を含め二人、従業員は瑠璃子を含めて八人と、それほど規模は大きくない。しかし真子の技術と、女性専用というのが人気を呼び、連日予約でいっぱいだった。

そういうわけで、毎日忙しいと言えば忙しい。だが連日残業の必要があるかと言うと、決してそんなことはなかった。今夜の瑠璃子は、今日するべき仕事はもちろんのこと、本当は今日しなくてもいいような仕事までしていたので、遅くなっていた。……いや、あえて遅くなるようにしたのだ。「さすがに今日は待つてなかったわね」

瑠璃子はそう小さく口の中で呟くと、ずり下がったバッグを肩にかけ直して歩き出す。その途端――

「瑠璃子」

背後からかけられた声に、瑠璃子はびくつと肩を揺らして立ち止まった。その声には聞き覚えがある。いやいや、聞き覚えがあるなんて生やさしいものじゃない。耳にたこができるくらいに毎日聞いている声だ。

瑠璃子は深々とため息を吐き出すと、ゆっくりと声のしたほうを振り返った。

「お疲れ様、瑠璃子」

「……お兄ちゃん」

どこに隠れていたのか。さつき周囲を窺った時には見えなかったはずの人影が、にこにこしながら

ら階段から下りてくる。細身で長身。銀縁眼鏡の奥にあるのは、優しげに細められ、少しだけ垂れた目。高い鼻に引き締まった口元。それらのパーツがバランスよく配置された顔は、見慣れていてもドキッとするほど整っている。

「さあ、帰ろうか」

そう言うと、お兄ちゃんこと陣内元樹は、瑠璃子の肩に手を回した。瑠璃子はすかさず、その手を払い除ける。

「お兄ちゃん、また待つてたの？　ひとりでも大丈夫だっていつも言ってるじゃない。お兄ちゃんはずっと前に仕事終わっていたんでしょ？」

間違いないそのはずだ。元樹は真上にある陣内歯科医院の歯科医師だ。そこそ瑠璃子の働くクリニックとは、終了時間が同じなのだ。瑠璃子は今日、一時間ほど残業をしていた。それを考える――

「お兄ちゃんの仕事が終わってから、もう一時間は経ってるはずよ？　ずっと外で待つてたの？　風邪引いたらどうするの？　私はひとりでも帰れるんだから、待つてなくてもいいのよ！」

びしっと人差し指を突きつけ、瑠璃子は元樹を睨み付けた。けれど当の本人はふわりと笑い、手を伸ばして瑠璃子の頭を撫でてくる。

「そんな顔したって全然迫力ないよ。それどころか、そんな顔も可愛いね」

まったくもって言葉の通じていない様子に、瑠璃子は再び深々とため息をつく。そして頭をナデナデしている元樹の手を払い除けた。

「……お兄ちゃん。あのね、私も二十四歳なわけですよ。もう小学生じゃないんだから、毎日のように送ってもらわなくなつて平気なの」

そう、本当にずらせない用事や、瑠璃子の仕事が先に終わることもない限り、元樹は毎日のように瑠璃子の帰りを待っている。何度も「ひとりで大丈夫」だと断っているにもかかわらず、聞く耳を持たないのだ。

「瑠璃子のお母さんと約束したからね。お前のことは俺がすっかり面倒を見るって」

そう言つて、元樹は優しい笑みを向けると歩き出した。

「ほら、もう遅いから急いで帰ろう？」

「……うん」

促され、瑠璃子は渋々その背中について歩きはじめる。

「それにしても、明日にでも姉さんに文句を言つてやらないとダメだね。自分はさつさと帰つて、こんなに遅くまで瑠璃子を働かせるなんて」

元樹は僅かに眉を寄せ、そんなことを呟いた。陣内審美歯科クリニックの院長である飯田真子と、元樹は姉弟だ。ふたりの父である陣内秀樹がこのビル所有者で、陣内歯科医院の院長なのだ。歯科医院では対応しきれない審美的な側面を補うため、同じビル内に姉の真子が審美歯科を開院していた。

「ちよつと待つてよ、違うんだよ、お兄ちゃん。真子先生は主婦なんだから家のこともあるだろうし、私は好きで仕事してただから。だから、文句なんてやめてよね」

まったく見当違いの言葉に、瑠璃子は焦つて元樹の服の裾を掴んだ。

まさか、元樹が先に帰つたらいいな……なんて思いながら、しなくてもいい仕事に手を出しているなんて言えるはずもない。

「それでも、やっぱり無責任だよ。姉さんだつて、瑠璃子のこと頼まれているんだから」

「だ、だからそれは小さい頃の話でしょう？」

「俺にとつてはまだ瑠璃子は小さいままだけど？」

ぽんと頭の上に手を乗せられ、瑠璃子はまたもやそれを勢いよく叩き落とした。

「それは身長の話でしょ？ これでも私はもう大人です！」

「昔はもつと素直で可愛かつたのになあ」

「余計なお世話です」

がっくりと肩を落とす元樹に、瑠璃子は思いきり舌を出した。

瑠璃子と元樹が出会つたのは、瑠璃子がまだ小学生になる前のことだ。

シングルマザーだつた瑠璃子の母が働いていたのが、当時ここは別の場所にあつた陣内歯科医院だつた。

元樹の母と瑠璃子の母が高校時代からの友人という縁もあり、小さかつた瑠璃子は、歯科医院と続きになつていた元樹の自宅によく預けられていた。

まるで家族の一員のように、元樹の母、沙也香にはよくしてもらつた。高校受験を控えていた真子は、塾通いが多かつたのであまり会うことはなかつたが、五歳年上の元樹は瑠璃子のことを本当

の妹のように可愛がり、優しくしてくれたのだ。

当時、体の弱かった瑠璃子を、元樹はそれはそれは過保護に扱ったものだ。くしゃみをすれば熱を測られ、少しでも熱があれば布団の中に押し込められた。喉が渴けば言う前に冷たい水が出てきたし、体調を崩した時にはずつと手を握っていてくれた。

『大丈夫だよ、僕がそばにいるからね』

辛い時にはそう言ってくれた元樹の声が、今でも耳に残っている気がする。

瑠璃子も元樹のことを、本当の兄のように慕っていた。……今だって、その時の気持ちが変わったわけではない。

でもすっかり健康体となり、すっかり大人になったというのに、相も変わらず過保護なのは違いない。いつまでも元樹に頼ってばかりではいけないと——自立しなければとずつと思ってきたのだ。でも、当の元樹のほうが、いつまでも子ども扱いをやめてくれない。

——なんて言ったらわかってくれるものかしら……。私に彼氏でもできたら、お兄ちゃんも安心するのかな？ でも……そういう相手もないしなあ。

そんなことを考えていると、「瑠璃子」と声をかけられ、はつと顔を上げる。

「瑠璃子、ほら、エレベーターがきたよ」

「あ、はい。ごめんさい」

慌てて瑠璃子もエレベーターに乗り込んだ。元樹はさつきふたりで買い物をしてきたスーパーの袋を両手で持ちながらも、器用に五階のボタンを押している。

「お兄ちゃん、ごめんね。私も片方持つのに……」

買い物をした後からずつと軽そうなほうだけでも持つと言っているのだが、元樹は頑として瑠璃子に渡さなかった。いつもそうだ。「荷物で手がふさがって、怪我でもしたら大変だ。だから瑠璃子は荷物なんて持たなくていいんだよ」と、過保護全開なことを平気で口にする。それをまじめな顔で言うものだから、もう瑠璃子は反論のしようもない。

「別に大丈夫だよ、これくらい。少しも重くないんだから。それよりも瑠璃子のほうが心配だ。いつつもぼうつとしてるんだから。さっきだって俺が言わなかったら、エレベーターがきているのだったって気付いてなかったら？ そんなぼんやりだから、心配なんだよ」

「ぼんやりなんて……ちよつと考え事をしていただけだよ」

「ふうん、どんな？」

銀縁眼鏡の奥から、心の中まで見透かそうとするかのような視線を投げかけられ、瑠璃子は思わず目をそらす。まさか「お兄ちゃんのお保護から逃れる方法を考えました」なんて、言えるはずもない。

「べ、別に。言いたくないことよ」

わざと突っぱねるような言い方をする。いつまでも子どもじゃないというアピールのつもりだったのだが……

がさつと音を立てて、買い物袋が床に置かれた。どうしたんだろうと思った次の瞬間、耳元でどんと大きな音がした。

「……きやつ」

その音に、瑠璃子は身を縮めてぎゅっと目を閉じる。

「瑠璃子」

間近で元樹の声が聞こえ、瑠璃子は恐る恐る目を開けた。そして視界に映った光景に、これ以上ないほど目を見開く。睫の数が数えられそうなほど近くに、元樹の整った顔があったのだ。

そして、さっきの音の正体も理解した。

囲い込むようにして、元樹の両手が瑠璃子の両側の壁に付けられている。さっきのは、元樹が壁に手を付いた音だったのだろう。

「お、にい……ちゃん？」

瑠璃子は怖々と元樹を見上げた。いつもと同じように微笑んでいるはずなのに、どうしてかその顔は冷たく怒っているように見えた。

「あ、あの……？」

こんな顔をしている元樹は見たことがなくて、体が竦んで動かない。びくびくしながら元樹からの言葉を待っていると、彼の口元が僅かに持ち上がった。その表情に、内心で「ひっ」と悲鳴を上げる。

笑っているのかもしれないが、どう見ても悪魔とか、魔王とか、死に神とか、空恐ろしいものしか連想できない。

「瑠璃子」

「は、はいいっ」

思わず声が裏返ってしまった。元樹がこんな顔をしているのは、きっと自分が彼を怒らせてしまったからに違いない。けれど、どれだけ記憶を高速でフル回転しても、その原因が思い当たらない。

——私、なにをした？ なにしてお兄ちゃんを怒らせた？ わ、わからない……！

「瑠璃子」

「は、はいっ、ごめんな……」

「言いたくないことって、もしかしてお前……彼氏でもできたんじゃないだろうな」
「……………は？」

元樹の口から出たのは、瑠璃子が考えもしなかった言葉。それに対してたっぷり数秒かけてから、瑠璃子はどうでもなく間抜けな声を出した。

「は？ じゃないだろう？ 俺に言いたくないってことは、男がらみなんじゃないのか？」

眉をつり上げ、なおも迫ってくる元樹の顔を、瑠璃子は呆れかえって手で押し返した。

「瑠璃子……っ、どうなんだ！」

「お兄ちゃん。ばかも休み休み言っちゃよう。だいたいね、仕事の帰りはずっとお兄ちゃんと一緒なんだよ？ そういう相手、作る暇あるわけじゃないじゃない」

ついでに言うのなら、なぜか元樹に門限まで決められ、友人と遊びに行った帰りも心配だからと駅まで迎えにこられるのだ。「合コンなんてダメ！ 絶対禁止！ あんな危険な集まりは断固禁

止！」と、いつも喚わめいているのは誰だ。

——まあ、合コンには興味ないし、それほど彼氏が欲しいとも思わないけど……

と言うのが、瑠璃子の本音だが。

「……本当だな？」

疑いという言葉を純粹培養したような目で、元樹が見つめてくる。

物心がつく前に父が他界してしまっているので父親がどんなものかわからないが、こんな感じなのかなあ……とふと思った。

「本当だよ。心配し過ぎだから」

「心配するに決まってるだろ？ その……瑠璃子のお母さんにもお前のこと頼まれてるし、俺の母さんだって、お前のこと、本当の娘のように思ってるんだ。悪い虫でもついたら、俺がドヤされる」ぶつぶつとぼつが悪そうに言い訳を口にする元樹に、思わずくすつと笑みがこみ上げてくる。なんだかんと言っても、元樹がこうして心配してくれるのは、瑠璃子だって本当のところ嬉しいのだ。自分のことを気にかけてくれる人がいるっていいな、と思える。

……素直ではないので、口にはしないが。

「もしもいい人ができたら、その時は一番にお兄ちゃんに紹介するからね。でもお兄ちゃんの目は敵敵しそうだから怖いなあ」

もし本当にそんな時がきたら、元樹はきつと殺気きつきを含んだざらざらした目で、瑠璃子の連れてきた相手を吟味するに違いない。でもきつと瑠璃子の選んだ相手なら、最終的には認めてくれる……

そんな気がした。

「ねえ、瑠璃子……」

「ん？」

「もしも俺がダメだつて言ったら……」

じつと見つめてくる元樹の秀麗な顔が、一瞬苦く歪ゆがんだ気がした。どうしたんだろうと思っただけれど、エレベーターが五階に到着したので、そちらのほうに気を取られる。

「あ、お兄ちゃん、着いたよ。荷物持たなくちゃ」

瑠璃子は元樹の腕の間からずりりと抜け出すと、床に置かれた買い物袋を持ち上げてエレベーターから降りた。けれどどうしたことか、元樹はエレベーターの中でがっくりと肩を落としている。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

声をかけると、なぜか恨みがましい目で睨にらみ付けられた。

「別になんでもない。それより、ほら、瑠璃子は持たなくていいって言ってるだろ？」

大股で近づいてきた元樹が、さっさと瑠璃子の手から買い物袋を引ったくる。

「別に重たくなつてなかったのに」

「いいの、瑠璃子は持たなくて。こういうのは俺の役目。お前は俺に甘やかされていけばそれでいいんだから」

と、イケメンが真顔で言った。真に受けてこの状況を受け入れてしまえば天国な気もするが、それでは人としてダメになってしまうだろう。

——やっぱり、このままじゃダメよね。自立しなくちゃ。

と、再び心に誓う瑠璃子だった。けれど。

「瑠璃子、ほら早く。鍵開いたよ」

「あ、はい」

あっさり『陣内』と表札のかかった部屋に入っていくのであった。

靴を揃えて脱ぎ、愛用のピンク色のスリッパを履く。靴はいつもの定位置に置き、ダイニングの椅子に引っかけたエプロンを身に着けた。

それから、元樹がキッチンに運んだ買い物袋を開け、瑠璃子は当たり前のように冷蔵庫に食材を詰め込んでいく。

「お兄ちゃん。今日の夕食、お魚でいいんだよね？」

そうキッチンから呼びかけると、居間の奥の部屋から元樹が顔を出した。さっきまで着ていたスーツを脱ぎ、今はざつくりとした白のニットにジーンズを合わせている。

スーツを着ていると大人の男性という感じがするが、ラフな格好をしていると、元々彼が持っている柔らかな雰囲気が強調される。

「そうしようと思っていたんだけど、瑠璃子はそれでいい？」

「うん、お味噌汁はわかめとネギにしようと思うんだけど」

「ああ、いいね。じゃあ、それは任せたよ」

「はあい」

と言って、瑠璃子は慣れた様子で調理用具を準備する。鍋に水を張って火にかけ、ネギを切りはじめたところで、隣に元樹が並んだ。

「俺は大根おろすから」

にっこりと笑って、元樹も慣れた手つきで大根の皮を剥きだした。デニムのソムリエエプロンを身に着けて料理をする元樹の姿は、様になつている。その整った顔つきとも相まって、まるで料理番組でも見ているようだ。瑠璃子は一瞬見とれてしまった。

「……ん？ どうかした？」

瑠璃子の視線に気が付いたのか、元樹が手を止めて不思議そうに視線を超越す。優しく微笑んだ元樹の前髪がさらりと揺れ、思わずドキツとする。頬がかつと熱くなった瑠璃子は、それを悟られたくなくて、ネギを切る手元に視線を戻した。

「な、なんでもない。その、お兄ちゃんは料理も上手ですごいなって思ってた」

事実、悔しいことに、元樹の料理の腕は瑠璃子よりもずっと上だ。千切りなんて、鮮やか過ぎてため息が出るほど。

「瑠璃子だって、だいぶ上手になったじゃないか。味付けだったら、今は俺よりもうまいと思うよ？」

「そ、それくらいは上達しないと恥ずかしいじゃない……」

ぼそぼそそう言って、瑠璃子は口を尖らせた。ここに……元樹と同じこのマンションの別フロアにある一室に住みはじめたのは、三年前。

資産家でマンションまで持っている元樹の父の計らいで、瑠璃子は良心的な家賃で住まわせてもらっているのだ。

その時から、「瑠璃子に任せておいたら、すぐに栄養失調でぶっ倒れるに違いない」という元樹の提案で、夕食は彼の部屋で一緒に取るようになっていた。

……確かに初めのうちは包丁を握る手もかなり危なっかしくて、まともなものも作れなかった。元樹の言うように、あつという間に食生活は破綻していたに違いないだろう。それでも、手伝いから始まって三年、今では簡単な料理なら自信を持って作れるようになった。

——あ……私って、自立したいとか言いながら、お兄ちゃんに助けられてばかりだよ。お兄ちゃんには本当に感謝してる。こんなに気にかけてもらって。でも甘えていないで、そろそろちゃんとしなくちゃ……

「も、もう、ひとりでも栄養失調になったりしないわ」

本当は痛いほど感謝しているというのに、長年の付き合いのせいで、瑠璃子はいつ元樹には意地っ張りな態度を取ってしまう。昔はこうじゃなかった気がする。彼の言うように、もつと素直だったのに……。いつからこうなってしまったのか、瑠璃子にももう思い出せない。

「だから、もうお兄ちゃんのお世話にならなくても大丈夫……ひっ」

最後まで言い終わる前に、包丁を握っている手首を掴まれ、瑠璃子は小さな悲鳴を上げてしまった。

「ちよ、お兄ちゃん！ 危ないじゃないのっ、今、ネギを切っていたのに」

「……危ないのは瑠璃子のほうだよ？ 手元を見ないで切っていると、そのうち指まで切っちゃうからね。それとも怪我して、俺に切った指を舐められたい？」

「……な……っつ、こ、子どもでもあるまいし、なにを言ってる……」

動揺してしまっただが、たちの悪い冗談だろうと瑠璃子は思っていた。思っていたのだけれど、眼鏡の奥の目が「本気だよ」と言っている気がする。切った指を舐めるだなんて、幼なじみ……というか、本当の兄妹だつて shouldn't 違いない。

自分の切った指先を元樹が口に含む光景をつい想像してしまい、瑠璃子の顔はぼつと火を噴いた。一瞬で思考回路まで沸騰し、なにか反論しようと思うのに、口がばくばくするだけで言葉が出てきてくれない。

「……どうしたの、瑠璃子。顔が真っ赤だよ？」

元樹はそう言うと、片手で瑠璃子の前髪を持ち上げた。そして自分の額を瑠璃子の額にそつと触れさせる。間近、と言うか直に触れ合っている状況に、瑠璃子は完全にフリーズしてしまう。

「うん、熱はなさそうだね。瑠璃子はすぐに体調が悪くなるし、ぼうつとしていて危なっかしいし、まだまだひとりなんて無理なんだよ。大人しく俺に面倒見られていればいいの」

満面の笑みを浮かべつつ、元樹は瑠璃子の頭をぼんぼんと二回撫で、再び作業をはじめた。

「指を切らないように気を付けるんだよ」

「……は、はい」

——い、今の急接近は反則ですよ。お兄ちゃん……

と、心の中で呟きながら、瑠璃子は謎の敗北感に打ちのめされていた。そう、いつもこうなのだ。いつだってこうなってしまうのだ。どんなに自立を試みてみても、元樹に「それはまだ無理だ」という結論を導き出されてしまう。しかも、反論の余地さえ与えられない。それは今のように急接近されて動揺してしまったり、やけに寂しげな顔にノックアウトされたり……と、方法は様々だがとにかく反論できなくなってしまうのだ。

結局これ以上言葉も見つからず、瑠璃子は指を切らないように料理に専念することにした。十分もすると夕食は出来上がり、それをふたりでテーブルに並べる。それからエプロンを外して、そろって手を合わせ「いただきます」だ。元樹と夕食を共にするようになってからずっと、必ずふたりそろってから食事をはじめるようにしていた。

直前にどちらかに電話がかかってきた時などは、それが終わるまで待つ。元樹はこうして瑠璃子の面倒を見てくれているが、本当は忙しい身なので、自宅に帰ってきてからも携帯が鳴ることは多い。

そんな時は当然、彼の電話が終わるまで瑠璃子はじっと待っている。夕食を目の前にして待たされるのは辛い。元樹と夕食を取らなければ、待たされることもないだろう。でも、そんなひとりの食卓が寂しいに違いないことは、瑠璃子だってわかっていた。

その一方で、寂しさを理由に元樹に甘えるのは違っても、瑠璃子は思っていた。いつかは元樹だって彼女ができるだろうし、そうなってしまえば、こんな関係が続けるわけにはいかないのだから。だから……その時がきても困らないように、瑠璃子は自立をしたいのかもしれない。その時がきても、途方に暮れてしまわないように。

瑠璃子は焼き魚を口に運びながら、ちらりと元樹を窺い見た。

容姿は端麗。けれど少しも嫌みがないのは、纏う雰囲気ソフトだからだ。すらりとした体躯はモデル並み。どちらかと言えば物静かで、読書を好むインドア派ではあるが、誰が見ても、元樹は相当にもてるタイプと言える。

なのに、元樹に彼女がいたのは、瑠璃子の記憶の中では彼が高校生の頃だけだ。それ以降、元樹に女性の影は知る限りない……と思う。

もしかしたら瑠璃子に秘密にしているだけかもしれないが、こうも一緒にいる時間が多いと、隠すことなど不可能な気がする。

——幼なじみの私から見ても、お兄ちゃんはかなり格好いいと思うんだけどな……。どうして浮いた話のひとつもないんだろう？

そんなことを考えながらちらちらと見ていると、元樹は瑠璃子の視線に気が付いたのか、ふと眼鏡の奥の瞳を和らげる。

「瑠璃子。いつそのこと、この部屋に引越してきたらいいのに」

突然の元樹の言葉に、瑠璃子は思わず口の中の焼き魚を噴き出しそうになった。さすがにそれは寸前でこらえたが、むせ込んでしまい、手元にあった水を啣る。

「な……っ、なに言ってるの!？」

——一緒になって……。そ、それって同棲ってことじゃないの？

いや、瑠璃子と元樹は恋人同士でもなんでもないので、同棲と言うのは違うかもしれない。けれど、いずれにせよ血縁関係もない男女が一緒に暮らすなど、恋愛スキルの低い瑠璃子には、想像だけでもレベルが高過ぎる。

元樹のたつた一言に思い切り乱す瑠璃子とは対照的に、彼は相変わらずにこにことした笑みを崩さない。

「なに……って。だって、毎晩俺の部屋で夕食を食べて、自分の部屋には寝に帰るだけのようなのだろう？ 俺の部屋は瑠璃子のところよりも部屋数が多くて余ってるんだから、ここに住んだほうが経済的だと思わないか？ 水道光熱費だって、折半すれば今よりもずっと安くなる」

「た、確かにそうだけど……」

元樹の言うことには一理も二理もある。

「それに瑠璃子はおばさんに仕送りだってしてるだろ？ お金はいくらあってもいいはずだよね？ ここに越してきたら、今までよりも多くおばさんに送れるんじゃないの？」

「……う、うん」

「どうせ、自分の部屋にいるよりも、俺の部屋にいる時間のほうが長いんだから。別々の部屋にいるよりも、ずっと勝手がよくなるとは思わないかい？ 瑠璃子の部屋はそれほど荷物も多くないんだから、引っ越しなんてすぐに終わるよ。俺も手伝ってあげるから」

「……」

元樹は次々に甘くて魅力的な言葉を囁きかけてくる。その言葉に、彼から自立しようと、自立してやるんだと意気込んでいた決心がぐらぐらと揺らぐ。

「自室に帰る心配もしないで、ここでゆっくりご飯を食べて、眠たくなったらすぐに休むこともできるよ？ 帰ることを考えなくて済むなんて、きつと楽だよ」

元樹の言う通りここに引っ越してきたら、確かに楽に違いない。

帰らなくてもいいというだけでなく、きつと元樹はかいがいしく瑠璃子の面倒を見てくれるだろう。それこそ、小さい頃のように、瑠璃子が欲しいものを言葉にする前に、それが目の前に差し出されるような……

居心地のいい空間を用意され、快適な生活を約束され、どっぷりと甘やかされるに違いない。ついでにイケメンの世話役付きとか、どんな乙女ゲーだ。

「……いい。ひとりで頑張れるから」

元樹の用意してくれるであろう、快適そのものの生活を思い浮かべ、瑠璃子は真顔で首を横に振った。

「……どうして？」

瑠璃子の答えが不満だと言いたげな表情で、元樹が首を傾げる。その目が、『こんないい条件、他にはない』と言っている気がする。いや、言っている。瑠璃子だってそう思うのだから。だからこそ、怖い。

——そんな蜂蜜漬け^{はちみつ}みたいな生活してたら、あつという間に人としてダメになる。現状でさえ、かなり甘やかされてるっていうのに……

元樹はよかれと思っただけで、さすがにそんなこと本人には言えるはずもないが。「……その、散々お世話になってこんなこと言うのもなんだけどね、お兄ちゃんと私の間には血縁関係はないわけでしょ。さすがに血の繋^{つな}がらない男女が同じ部屋に住むって言うのはどうかと思うのよ」

蜂蜜漬けうんぬんもそうだが、一番の理由はこつちだ。小さい頃から家族同然に過ごしてはきても、本当の家族ではない。年頃の男女が一つ屋根の下に……なんて、まずいのではないかと思ってしまうのは、瑠璃子の頭が固いからなのだろうか。

それに、元樹が同じ部屋にいると思えば、お風呂上がりに下着姿でうろつくこともできないし、寝起きのブサイクな顔でうろたえることもできない。

「私だって一応年頃なんだから、見られたくない姿っていうのもあるのよ」

さすがにその具体的状況は言わないが。瑠璃子は立ち上がると、使い終わった食器を台所に運んだ。

腕まくりをして食器を洗いはじめたところで、元樹も使い終わった食器を台所に運んできた。

「あ、お兄ちゃん、食器はそこに……」

「気にしないのに」

「え？」

元樹の口から出た言葉の意味がいまち掴めず、瑠璃子は泡のついたスポンジを手にしたまま、彼を見上げる。

「別にどんな姿だつて、俺は気にしないのに。……っていうか、気にならないけどね。一緒にお風呂に入ってた仲だろう？」

元樹は瑠璃子の肩をぼんぼんと叩くと、鼻歌まじりに冷蔵庫を開けてビールを持って行く。プシュと缶を開ける軽快な音が耳に届き、瑠璃子の肩から盛大に力が抜けた。

——そうか。そうか、そうか、そうか、そうだよ。うん。そうなんだ。スポンジで食器を擦りながら、ひとり納得する。

——お兄ちゃんは私のこと、女だつてことも多分忘れてるんだわ。つて言うか、お兄ちゃんにとっては、私はいつまでたつても小さな子どものままつてわけね。そりゃあ、なんの戸惑いもなく一緒に住もうなんて言えちゃうわけだ。

事の真相がわかると、瑠璃子はさつき一瞬でも『同棲』という言葉が脳裏に浮かんだ自分が恥ずかしくなってきた。

そんな色っぽいものではなく、元樹にとってみれば、手のかかる子どもを近くに置いておきたいだけという……

——くそうっ！ 絶対に自立してやるんだからっ！

湧き上がってくる恥ずかしさを、自立への決意に変え、瑠璃子はがしがしと食器を洗った。いつもなら食器を洗い終わった後は、元樹と話をしながらテレビを見たりするのだが、今日はそん

な気になれない。自立に向けて決意も新たに、エプロンを外すと、さっさと鞆を引つ掴む。

「あれ、瑠璃子。もう帰るの？ お前の好きなカクテルも冷蔵庫に入ってるよ？ あ、チーズもあるけど」

「チーズ？」

大好物をコイルされ、思わず目をキラキラさせて振り返ってしまった。

「うん。瑠璃子がこの前食べたと言ってたやつ、ネットで見つけたから買ってみたんだ。ああ、そのチーズに合いそうなワインも買ってあるから、それ開ける？ 今用意するよ」

「い……いいっ！」

瑠璃子はソファから立ち上がった元樹にそう言って、ぶんぶんと首を横に振った。

「きよ、今日は帰る、から」

本当はチーズもワインもこれ以上ないほど魅力的だ。でも、それを我慢できなくては、自立なんてとても無理だろう。

「いいの？ すごく美味しそうだったよ？」

「……うっ」

眼鏡の奥からじつとこちらを窺っている瞳が、『帰るんだったら俺がひとりで食べちゃうよ』と言っている気がする。そういう目に瑠璃子が弱いことを、彼はよく知っているのだ。でも。

「い、いいの。今日は帰る」

誘惑に後る髪を引かれつつ、瑠璃子はドアノブを掴んだ。

「急いで帰る理由でもあるの？ 誰か……待っているとか？」

どことなく尖^{よが}って、苛立ちを含んだような声が背中にぶつかり、瑠璃子は不審に思っ振り返る。そこには声の調子とは正反対に、胡散臭いほど爽やかな笑みを顔に貼り付けた元樹が、ソファにふんぞり返っていた。

「俺に隠し事でもある？ お前が好物を前にしても帰るって言うなんて、おかしいだろ」

——なにそれ。私ってお兄ちゃんの中でどんなキャラ？ って言うか……

「お兄ちゃんって、お兄ちゃんっていうよりも、□うるさいお父さんみたい」

「……なっ！」

思わずくすくすと笑ってしまった瑠璃子とは対照的に、元樹は苦り切った表情で固まってしまった。それから大きく息を吐き出し、両手でわしゃわしゃと髪の毛を掻き混ぜる。

「あのな……お父さんはないだろ？ それはさすがに傷付く」

乱れた髪の間から、元樹が恨めしげな視線を投げかけてきた。そんな視線にさえ、また、くすつと笑みが浮かぶ。

「だって……お兄ちゃんたら、心配し過ぎなんだもん。まるでドラマや小説に出てくる頑固なお父さんみたい。でも私、お父さんがいないから、ちよつと嬉しいかも」

けなすつもりで言ったわけではないのに、元樹は難問でも突きつけられたかのような顔をして、頭を抱えてしまった。

「……少し、接し方を考えないとダメだな」

そう、ため息まじりにぼそりと呟く。

「そうだよ、お兄ちゃん。私だつてもう大人なんだから。それじゃあ、帰るね」

今度こそドアノブに手をかけた瑠璃子だったが、再び元樹を振り返る。

「あ……ちなみに、誰かが待つてるわけじゃないよ？ 残念ながら、そんな相手はいません」

別に元樹を安心させるために言っただけではない。ただ……誤解されたままでは、いつまでもグチグチ言われそうな気がしたただけだ。いや、でも本当は、誤解を解いて元樹の機嫌を直したかった。瑠璃子にとつて元樹は大事な幼なじみなのだ。難しい顔をしているよりも、いつもの穏やかな彼でいて欲しい。

そう思ったのだが……

「そうか……うん、それならいいんだ」

先程までの難しい顔が、瑠璃子のたった一言で柔らかく綻ぶ。ほっとしたような、嬉しそうな、それでいてどこか色気を含む笑顔に、瑠璃子の胸は思わず跳ねた。かあつと頬が熱くなる。

そんな火照った顔を見られたことなく、瑠璃子はさつと元樹に背を向けた。

「う、うん。じゃあ、そういうことから」

元樹は昔から抜きん出て格好よかつたが、最近では妙に男の色気が加わり、見慣れている瑠璃子でさえドキツとさせられることが度々ある。

——本当にこれで彼女がいらないとか、お兄ちゃん、もしかしたらあっちの趣味なのかしら……と、腐女子的妄想をしながらドアを開けた時だった。

「ああ、瑠璃子、ちよつと待って」

と、元樹に呼び止められる。

「俺、明日は学会があつて帰りは夜遅くなるから、寄り道なんてしないで帰ってくるんだよ。食事もしつかり取って、部屋の鍵は忘れずにすること。夜にひとりで出歩いたりするんじゃないよ。いね？ ああ、それから俺がいらないからって合コン行くとか、言語道断だからね」

まくし立てるようにそう言つて、元樹は目の前までやってくると、瑠璃子の両肩にぼんと手を置いた。

「電話するから、ちゃんと携帯の電源は入れておくんだよ？ なにかあつたら、いつでも連絡して

おいひ」

「……あー……えーと……」

眼鏡の奥の目が真剣過ぎて、痛いくらいだ。見つめ返すこともはばかられ、視線をさまよわせながら瑠璃子は深々とため息をついた。なんだかもう、突っ込みどころの多さに呆れてくる。

「わかったね？」

「……はい、わかりました」

勢いに押されてそう答えると、満足げに微笑んで元樹は瑠璃子の頭を撫でた。

「じゃあ、気を付けて帰るんだよ？」

——気を付けて……同じマンションの一室に帰るだけじゃない。

小さな子どもでも問題なく帰れそうな距離だというのに、本気で心配されているらしい我が身が

情けなくなってくる。

それでもそんな気持ちのまま帰るのも癪しやくに思えて、瑠璃子はにっこりと笑みを浮かべて元樹を見上げた。

「うん。ありがとう。気を付けて帰るね、……お父さん」

「……っな！」

がーんという擬音が見えそうなほどの表情で、元樹が固まる。

「じゃーね」

そう言っつて、内心でべろりと舌を出す。

こみ上げてくる笑いをこらえながら、瑠璃子は元樹の部屋を後にした。

「じゃあ、次回は三日後の六時からになります。お大事にしてくださいね」

本日最後の患者さんを見送り、瑠璃子はたまっていたカルテを整理しはじめる。今日は予約が詰まっつていて、カルテの整理もままならなかったのだ。

「……さすがにちよつと疲れたな」

そう独り言を呟いて、瑠璃子はすっかり凝り固まってしまった肩を回す。ごきごきと硬い音がして、思わず苦笑いする。

「瑠璃ちゃん、お疲れ様〜」

「あ、真子先生、お疲れ様です」

瑠璃子同様、肩ががきがきいわせながら真子が奥から出てきた。元樹と似たその顔は、彼同様かなり整っている。ただ、真子はきりりとした美人なので、元樹とは違ってどちらかというところ冷たく見えてしまう。実際はざつくばらんで、男前な人なのだが。

そういえばまだ小さい頃、泣き虫でことあるごとに元樹の背中に隠れていた瑠璃子は、いつも真子に『すぐ泣かないの！』と、怒られていた気がする。

その頃はそんな真子が少しだけ怖くもあつたが、彼女の言っていた『すぐに泣かないの。涙は女の武器なんだから、すぐに使ったら効果が薄れるでしょ？ 最終兵器に取っておきなさい』という言葉の意味は、この年になってなんとなくわかるようになった。

そんなことを中学生の頃から瑠璃子に吹き込んでいた真子は、違う意味で怖い人なのかもしれないが。

「今日はお疲れ様でした」

「本当、疲れちゃったわあ。ああ、早く帰ってビール飲みたい。あ、これこっちにしまつたらいいのかしら？」

そう言いながら、真子はカルテの束を手取る。

「真子先生、いいですよ。私ひとりですみますから。先生は早く旦那さんのところに帰ってあげてください」

今日の真子は、休む時間もほとんど取れないほど忙しかったのだ。そんな彼女にこれ以上仕事をさせるわけにはいかないと、瑠璃子は真子の手からカルテを引つたくる。けれどそれはすぐに真子

に奪い返されてしまった。

「いいの、いいの。だって、そろそろあれが迎えにくる頃でしょう？ 仕事が終わってなかったら、後から、姉さんは瑠璃子を働かせ過ぎだとか文句言われちゃうの」

真子の言う『あれ』が元樹のことだとすぐにわかり、瑠璃子は思わず苦笑いを浮かべる。

「大丈夫ですよ。お兄ちゃんなら、今日は学会があるとかで朝から出かけていますから」

「学会？ ああ、そんなこと言ってたかもしれないわね。だから今日はあいつのうざい気配がないってわけか」

「うざいって……」

うざいってことはないんだけどなあ……

と思いつつ、瑠璃子は小さく笑った。

「瑠璃ちゃんは、うざくないの？ あんなの一步間違ったらストーカーじゃない」

真子のうんざりした口調に、瑠璃子は緩く首を振る。

「うざいってことはないんですが……いつまでも私の心配ばかりで、申し訳なくって。もっと自分のことを考えてくれたらいいのに……って思う時はあるんです。私のせいで、自分のことができているんじゃないかって」

瑠璃子にとって真子は、元樹に比べたら遠い存在だが、素直になれるのは彼女のほうだった。とても元樹には言えない本音をぼつりと零すと、真子はちつと小さく舌打ちをした。

「あいつ……まったく詰めが甘いわね。本当にチキンなんだから」

「え？」

真子の吹きに首を傾げると、彼女はにっこりと笑って見せた。

「あ、いいのいいの、こつちの話。瑠璃ちゃんは気にしなくていいからね。それよりも今日は早く帰りなさい。遅く帰したのがバレたら、あのうるさい弟に、俺のいない時にとかなんとか絶対に言われるから」

元樹が真子に対して実際のところなにを言っているのかは知らないが、彼女のげんなりとした顔を見ればなんとなく想像がつく。

「あ、あの……真子先生。すみません」

瑠璃子が悪いわけではないのだが、どうにも申し訳ない気持ちになつてそう言うと、真子は声を上げて笑った。

「なに謝ってんのよ。瑠璃ちゃんが悪いわけじゃないじゃない。って言うか、ばか元樹のほうが善人面で瑠璃ちゃんに迷惑かけちゃってるんじゃないの？」

「そ、そんなことないですってば。お兄ちゃんは本当によくしてくれています。……本当に、申し訳なくなつちゃうくらいに。私に手がかかるから、きつとお兄ちゃんは彼女を作れないんです。だから私、早く自立しなくちゃって思うんです……。そうしたらお兄ちゃんも安心して、自分のことができるんじゃないかって」

そこまで言つて、瑠璃子ははつとして言葉を切った。明らかにしゃべり過ぎた気がする。

「あ、あの、すみません。なんだか私……」

「いいのいいの、わかってるってば。瑠璃ちゃんは瑠璃ちゃんなりに、元樹のことを心配してくれてるんだよね？」

その言葉に、瑠璃子は素直にくんとうなずいた。迷惑をかけている身で心配するなどおこがましいのかもしれないが、それでも、瑠璃子は元樹のことが心配だった。

本当は、自分のせいで元樹の生活が犠牲になっているのかもしれない——そう思うだけで辛かった。だから早く自立して、元樹に迷惑をかけないようにしたいと考えていたのだ。

「ねえ、瑠璃ちゃんは彼氏とか作る気がないの？」

「彼氏ですか？」

瑠璃子はカルテを棚に仕舞いながら、首を傾げた。彼氏を作る気があるか、ないかという問題よりも、そういう出会いがほとんどない。それに自分に彼氏がいる状況を、瑠璃子は思い浮かべることができなかった。

「よく……わからないです」

「うーん、そうだよ。あれだけ元樹がびったり貼り付いていたら、男の人と知り合うチャンスもないか……。あ、ちよつとごめん」

真子は突然鳴り出した携帯を、白衣のポケットから取り出す。なんとも答えずに困る言葉の後だったので、正直なところ瑠璃子は少しだけほっとしていた。

「え？ そうなの？ うん、じゃあ今出るから」

そう言うと真子は通話を終了させた携帯を、再びポケットに押し込む。

「旦那さんからですか？」

そう声をかけると、真子はうなずいた。

「ええ。今、迎えにきてくれてるんですって」

「じゃあ、後は私がやっておくので、真子先生はお先にどうぞ」

元樹のお迎えもないのでのんびりやるうと思つた瑠璃子だったが、真子は手に持っているカルテを、ものすごいスピードで片付けはじめた。

「だから、それじゃ私が後々元樹に叱られるんだってば。ほら、瑠璃ちゃんもさっさと手を動かす！ 終わらせて帰るわよ！」

「え？ は、はい」

ほらほらと真子に急かされ、カルテ整理を終え替えをし、外に出る。道路脇には何度も見たことのある、真子の家の車が停まっていた。

黒のセダンの運転席の窓が開き、よく見知つた真子の夫、飯田俊史が顔を出す。

「瑠璃子ちゃん、久しぶりだね。よかつたら乗っていかないかい？」

九つ離れている真子よりも、更に六歳年上の俊史は、瑠璃子からしてみれば完璧な大人の男性だ。思わずしゃきんと背筋が伸びる。

「い、いえ。大丈夫です」

「そうよ、乗っていったらいいじゃない。……あら」

助手席に乗り込もうとドアを開けた真子が、後部座席に誰かいることに気付いて笑みを浮かべる。

「あら、笹井君も乗ってたの？ あ、こちら私のところで働いてくれる崎本瑠璃子ちゃん」

真子がそう言うのと後部座席の窓が開いた。

「瑠璃ちゃん、夫の部下の笹井亮平君」

「あ……崎本瑠璃子です」

「どうも、笹井です。真子先生のご主人には、いつもお世話になってるんです」

なんだかよくわからない流れで、初対面の男の人と挨拶を交わすことになり、瑠璃子は戸惑ってしまった。けれど瑠璃子とは対照的に、笹井亮平と紹介されたその彼は、笑みを浮かべて会釈をしてくれた。

爽やかで人懐っこそうな笹井からは、快活な印象を受ける。太陽の下で、スポーツに汗を流しているのがとても似合うような……

——なんだか、お兄ちゃんとは全然タイプの違う人だな。

と、瑠璃子は無意識に元樹を引き合いに出して考えていた。身近にいる男の人は元樹くらいしかないのだから仕方ないのかもしれないが。

「真子、これから笹井を家に連れて行っても構わないかな？」

運転席から俊史が真子に呼びかける。「大丈夫よ」と答えながら、真子は名案が浮かんだというように、胸の前で手を合わせた。

「そうだわ。せっかく笹井君がくるなら、よかつたら瑠璃ちゃんも一緒にどうぞ？」

「……えっ」

突然の提案に、瑠璃子は思わずたじろいだ。ちらりと後部座席のほうを見ると、にこにここちらを見ていた笹井と目が合い、瑠璃子はさっと視線をそらしてしまった。

「え、えっと……」

「いいじゃない。どうせうるさい保護者もないんだから。ね？」

「そうしたらいいじゃないか。瑠璃ちゃん」

飯田夫婦にそう誘われ、瑠璃子は俯く。

真子の家にお邪魔するのが嫌なわけじゃない。ただ、元樹以外の男の人に免疫のない瑠璃子は、初対面の男性がそこにいるというだけで怖じ気付いてしまうのだ。

——それに、お兄ちゃんに『寄り道しないように』って言われてるし……

と、断る理由を見つけた気がして瑠璃子はほっとした。元樹の言いつけをまじめに守るつもりなど本当はなかったのだが、この場を切り抜けることができるなら、その言葉を守ってみようと現金な思いが浮かぶ。

「あ、あの。お兄ちゃんに真っ直ぐに帰るように言われていますし、今日はちょっと疲れてしまったので帰ります」

「うーん……そうねえ、今日はかなり忙しかったものねえ……」

真子はそう言いながら、納得したようにうなずいている。

「わかったわ。それじゃあ送って行ってあげる」

そう言って真子が後部座席のドアを開けようとするのを、瑠璃子は慌てて止めた。

「真子先生。あの、本当にいいんです。私の家と真子先生の自宅は正反対だし、買い物もしていきたいんで、本当に……」

「そう？ 本当にいいの？」

「はい」

真子の服の裾を掴んで見上げていると、やっと「わかったわ」と真子が微笑む。その言葉に、瑠璃子は心底安堵した。

「それじゃあ気を付けて帰るのよ」

「はい。じゃあ真子先生、また明日」

真子に乗せた車を見送り、瑠璃子は息をついて空を見上げた。どんよりとした重たそうな雲が空一面に立ちこめている。

「やだ……雨が降ってきそう。早く帰らなくちゃ」

そう呟いて、瑠璃子は早足で歩き出した。

叩き付けるような雨の音と、木々を揺らす風の音が、テレビのボリュームを上げた室内でもはっきりと聞こえる。

「天気予報ではこんな雨が降るなんて言ってなかったのにな……」

そう独りごちながら、瑠璃子は濡れた髪の毛をバスタオルで拭いた。

急いで帰路についた瑠璃子だったが、もう少しで自宅マンションが見えるというところで、雨に

降られてしまった。バケツをひっくり返したような雨でびしょびしょになってしまい、すっかり体が冷え切った。すぐにシャワーを浴び、今ようやく温まったところだ。

瑠璃子は買ってきた夕食に手を付けず、パジャマ代わりのワンピース姿でじつと膝を抱えていた。普段、元樹がいる時にはふたりで食事を作るので、お弁当など滅多に買わない。だから今日は久しぶりにお弁当でも食べてみようかと思ったのだが——食べる気が起きないのだ。

それに、渦を巻く風の音と、窓を叩き付ける雨の音が気になってたまらない。突如お腹に響くような雷鳴が轟き、瑠璃子は「ひっ」と声にならない悲鳴を上げて、手のひらで両耳を覆った。

「や、やだやだやだやだ……っ。……ッひゃあ！」

連続でごろごろと雷鳴が響く。先程よりもその音は小さかったが、瑠璃子はびくんと震え、そしてこれ以上ないというほど体を丸く縮こめた。

なにも聞こえないようにぎゅっと両耳を塞ぎ、きつく目を閉じ、血が滲みそうなほど強く唇を噛みしめる。体中の筋肉は緊張し、痛みを感じるほどだ。

——雷なんて怖くないじゃない。ただ音が大きいだけ。怖くない、怖くない……っ。

と、自分に必死で呪文をかけてみるが、悲しいかな、効果は一向に表れてくれなかった。やはりどうしようもなく怖くて、瑠璃子は震える体を強く抱きしめる。

自分でもこんなに雷を怖がるなんてばかみいだと思っっているのだ。だけど、体の震えをどうすることもできない。

雷が怖い理由を、瑠璃子自身、実はなんとなくわかっている。

あれは多分、元樹と出会って間もない頃のことだったと思う。

その日瑠璃子は、いつものように陣内家に預けられていた。元樹の母である沙也香は近所に用があるとかけていて、真子も塾でおらず、元樹もまた習い事から戻っていないかった。

そんな時、突然襲ってきた寒気と息苦しさ。自分の体がおかしいことは、小さな瑠璃子にもわかった。けれど、母は仕事中心だと思おうとそれを邪魔することもはばかられ、震えながらソファにじつと横たわっていた。

苦しくて、不安で、泣きたくて、辛くて……でも、母の邪魔をしたくはなくて。色々な感情をこらえている瑠璃子を追いつめるかのように、外は強い風が吹き、雷鳴が轟いていた。

過去の感情や記憶がその音により呼び起こされるから、今でも雷が嫌いなのだろう。

——そして、あの時……

思い出して、瑠璃子は体を強張らせたまま、それでも口元に笑みを浮かべた。

そう、あの時。高熱に朦朧としながらも、雷の音に怯えていた瑠璃子を見つけてくれたのは、帰宅した元樹だった。

『瑠璃ちゃん』と叫ぶような声で駆け寄り、すぐに元樹の部屋のベッドで寝かせてくれた。自分だって雨に濡れてべしゃべしゃなのに、着替えもしないで瑠璃子に寄りそってくれた。

『大丈夫だよ、瑠璃ちゃん。僕がそばにいるからね』

そう言っただけでくれた手の温もりに、どれだけ安心したかわからない。

けれど次の日、今度は元樹が熱を出してしまったのだ。理由は簡単だ。濡れた服を着替えもせず

に、瑠璃子の看病をしていたせい。それなのに、元樹は『瑠璃ちゃんが元気になってよかった』と、笑ってくれたのだ。

「……私、いつもお兄ちゃんに助けられてきたよなあ……」

と、瑠璃子は自分の手のひらを見つめて呟いた。

そう。ちよつと思ひ出すだけでも、瑠璃子が辛い時や寂しい時は、いつも元樹がそばにいて手を握っていてくれた。さすがにそれは子どもの時までで、元樹が中学生になる頃には、手を握ってくれることは少なくなったが……

それでも、ずっと元樹は瑠璃子を見守ってくれていた。

——ずっと？　ずっとだっけ？　……ううん、違う。だつて……

「……ッ！」

それまでよりも一層大きな雷鳴に、瑠璃子は声も出せず更に体を縮こめた。浮かびかけていた思考も、ばらばらに千切れて消える。

「……もう、やだ。怖い」

怖い、そう口にした途端、我慢していた恐怖心が一気に膨らみ、瑠璃子を包んだ。

「怖い……怖いよ」

いつかのように、瑠璃子の手を握ってくれた温もりは、今はそばにはない。もう小さな子どもじゃないんだから当然と言えば当然だろう。だけど……

——お兄ちゃん、怖いよ。お兄ちゃん……お兄ちゃんっ！

瑠璃子は必死に心の中で元樹を呼んだ。そして口には出さないようにと、ぐっと唇を引き結ぶ。そう、もう小さな子どもではないのだと。いつまでも元樹を頼っていてはいけないのだと、誰に言われるまでもなく瑠璃子が一番わかっているのだから。

耳を塞いでいても聞こえる雷鳴に、情けないことに涙が滲んでくる。もう大人なんだから、と自分に言い聞かせたところで、怖いものはやはり怖くて、どうにもできなかった。

立てた膝に顔を埋めて耳を塞ぎ、瑠璃子はひたすら雷が遠ざかるのを待つことしかできない。雷鳴が轟く度に硬くした体を震わせ、きつく目を瞑って涙が溢れてくるのを必死でこらえる。

そんな時間がどれくらい経ったのか、耳を塞ぎ目を閉じていた瑠璃子にはよくわからなくなっていた。ただ、怯え続けているせいだろうか。強い疲労感が瑠璃子を苛みはじめていた。

——いつになったら収まるのかな……。ああ、こんなことなら、真子先生のところにお邪魔していればよかったのかもしれない。ひとりじゃなかったら、こんなに怖くなかったのに……

弱い気持ちがおみ上げてきて、なんとか我慢していた涙が一気に湧き上がってきた。

「う……う……う……」

一度崩壊してしまった涙腺は、簡単にはどうすることもできない。涙だけに止まらず、しゃくり上げるような嗚咽まで漏れ出してきた。

——こら、しっかりしなさい！ 二十四にもなって雷ごときでなにを泣いてるの！ 情けない！ と、心の中で自分を叱咤してみても、虚しいだけだ。

こみ上げてくる嗚咽を必死にこらえるが、心は折れてしまいそうだ。いや、いつそ心がボキボキ

に折れて、声でも上げて泣いてしまったほうが楽になるのだろうか……。もうここまで我慢したんだから、大声上げて泣いても許されるんじゃないか。

そんなどうしようもない考えが頭に浮かんだ時だった。

「瑠璃子」

と、元樹の声が聞こえた気がした。

——あーあ……本格的に情けないなあ……どうとう幻聴まで聞こえてくるなんて。自分の弱さと元樹に対する甘えに落ち込みつつ、瑠璃子は一層強く顔を膝に押し付けた。幻聴だとわかっていて、顔を上げる気になど到底なれない。やっぱりそこに元樹がいないとわかった時、

寂しさだけがどうしようもなく膨れあがるに違いないのだから。

けれど。

「瑠璃子！」

今度はさつきよりもはつきりと元樹の声が聞こえた。声だけではない。痛いくらいに両肩が強く揺さぶられる。

「……え？」

正直、すぐにはなにが起こったのか理解することができなかった。けれど、肩を揺さぶられてぶれる視界の中に、真っ直ぐに自分を見つめる元樹の姿を見つけた。幻覚なんかじゃなくて、本物の

元樹の姿を。

「瑠璃子……？」

「大丈夫か？」

「大丈夫か？」

「大丈夫か？」

はつきりと声が聞こえる。まぼろしなんかじゃない。

「お……に、ちゃん？」

どうしてここにいるの？ と聞く前に、元樹の手が伸びてきて、涙で濡れた頬をぐいぐいと擦られた。その動作はどこか乱暴で、瑠璃子を見下ろしてくる表情は少しだけ怒っているようにも見える。

「い、痛いよ、お兄ちゃん。ん……っ、自分で拭けるっつば」

「いいからじっとしてろ。まったく……子どもじゃないんだから、雷かみなりくらいで泣くなよ」

「ご、ごめんさい」

元樹は瑠璃子の顎あごを持ち上げると、そばにあったティッシュで目の周りを、今度は壊れものでも扱あつかうかのようにそっと拭ぬぐってくれた。

それはさっきまでの乱暴さとは正反対に優しい動作だったが、ちらりと薄目を開けて窺うかがった元樹の顔は、不機嫌そのものだ。

「あの……お兄ちゃん」

「どうしてすぐに俺を呼ばなかった」

「え？」

音がしそうなほど奥歯を強く噛みしめた元樹が、眼鏡の奥から真っ直ぐに瑠璃子を睨にらみ付けてくる。

「だから、どうしてすぐに俺に連絡してこなかった？ 雷、昔から苦手だろ？ なにかあったらす

ぐに連絡するようになって言っておいたのに、どうしてすぐに俺を頼らない？」

「え、ええっ？」

——そんなことで怒っていたのっ？

怒りの原因があまりにも理不尽だ。瑠璃子は、ただこちらを睨む元樹を見上げることしかできない。

「泣くほど怖がつて震えているくらいなら、俺に電話の一本くらい入れられたらだろ？ それを、どうしてひとりりで耐えてるんだよ、お前は。そんなに俺は頼りにならないか？」

責め立てるような元樹の口調に、今まで雷に怯えていたことも忘れ、瑠璃子は口を尖とがらせた。

「だ、だってお兄ちゃん、仕事で出かけていたんだよね？ 帰りは遅くなるって言ってたじゃない。確かに雷は怖いけど、たかが雷くらいでお兄ちゃんの仕事の邪魔はできないよ」

間違ったことを言っただけでもない。むしろ正論を述べたはずなのに、元樹は「まったく全然わかってない」とでも言いたげに、ため息をつきながら首を横に振っている。

そして真っ直ぐに瑠璃子を見つめてきた。

「別にお前はそんなことを気にしなくていいんだよ、瑠璃子。お前は、なにも考えないで、困った時には、いつでもすぐに俺を頼ればいいの」

大まじめに言い放つ元樹に、瑠璃子は頭が痛くなってきた。甘やかしてもここまでくると、罰せられていい気がする。

「あのね、お兄ちゃん。前々から言っているけど、私を甘やかさないで。もう子どもじゃないんだ

から、こんなことでお兄ちゃんの仕事の邪魔なんてできるはずないでしょう？」

元樹の視線に負けないよう、瑠璃子も必死に元樹を睨み付けた。

本当は甘やかされるのが嫌とか、そういうことじゃない。元樹が自分を犠牲にしてまで瑠璃子のために色々してくれるのが苦しいのだ。

ストリートに「自分のことを一番考えて」と言ったところで、きっと元樹は変わらない。自惚れかもしれないが、「俺のことなんてどうでもいい。一番に考えなくちゃいけないのは瑠璃子のことだ」とかなんとか、元樹なら言う気がするのだ。

「そんなに甘やかされると、私、なにもできないダメ人間になっちゃうよ」

だから、過度な甘やかしによって起こり得る弊害を、大げさに伝えてみたのだが。

「……なったらいいんじゃないの？」

「……えっ？」

思わず聞き間違いかと耳を疑った。

きっと元樹なら、それではいけないと思いき直してくれると思っていたのに。なのに、今彼は『なったらいいんじゃないの?』と言わなかっただろうか。

「あの……え?」

戸惑いがちに元樹を見つめ返すと、眼鏡の奥の目は相変わらず真剣なままで、口元だけがゆつくりと持ち上がった。危険をそのまま具現化したような、見たこともない元樹の笑みに、背筋に冷たいものが流れる。無意識に息を呑んだ。

「いつそダメ人間になってしまえばいい。そうしたら……」

——そうしたら、なに？

その言葉の先を知りたいと思ったけれど、それは叶わなかった。それまでが一番大きな雷鳴が響いたのだ。瑠璃子は声にならない悲鳴を上げ、目の前の元樹に思わず抱きつく。しかも、それまで明かりに満たされていた室内が、急に真っ暗闇になった。

「な、な、な、なにが、なにが起こったの?」

さっきまで明かりに目が慣れていたせいで、本当になにも見えない。暗闇の中、ただ風と雨が渦を巻く音だけがはつきりと聞こえた。

「大丈夫だよ、きつと停電だ」

元樹はそう言うと、長い腕で瑠璃子の小さな体をすっぽりと抱きしめた。その温もりと、ずっと昔から記憶に刻み込まれている元樹の香りに満たされ、瑠璃子はほっと安堵して……それから大いに慌てふためいた。

よく考えてみたら、元樹がここに来るなんて思ってもいなかったの、お風呂上がりの瑠璃子は相当無防備な格好をしていたのだ。ワンピースは身に着けてはいたが、ノーブラ。元樹と密着したことで、今更ながらその事実を思い出してしまった。

「て、停電か。びっ、びっくりしちゃった。お兄ちゃん、も、もう大丈夫、だから」

手を突っ張って、元樹の腕の中から逃れようとしたのだが、しっかりと体に巻き付いた腕は解けてくれない。

「でも瑠璃子、雷もダメだけど、暗いのもダメだろ？」

「そ、そうなんだけど……」

さすがに、「ノーブラなので離れてください」とは言えない。でも、体が密着したままだと、言わなくてもバレてしまいそうで恥ずかしい。

「だっ、だから、甘やかし過ぎはよくないし、ひっ、ひとりでも全然大丈夫だから……っ」

恥ずかしさで半ばパニックになりそう言うのと、元樹は「うん、そうか。わかった」と、抱きしめていた瑠璃子の体を放した。

あまりにもあつさりし過ぎている。拍子抜けした気分になった瑠璃子の頭上に、元樹の静かな声が降ってきた。

「じゃあ瑠璃子、ひとりで大丈夫みたいだから、俺は自分の部屋に帰るよ。お休み」

「え？ ちょ、お兄ちゃん？」

さっきまでの甘やかしから一変、急に突き放すその言葉に、瑠璃子は焦って手を伸ばした。けれど、さっきまで元樹がいたはずの場所にはなにもなく、手が虚しくさまようだけ。

「お兄ちゃんっ？」

「なに？」

少しだけ離れた場所から声が聞こえ、ほっとした反面、なんだか腹が立ってくる。

瑠璃子が雷も暗闇も苦手なことをよく知っていたながら、このタイミングで帰るとかどんな悪魔なんだ、と。けれど。

「どうしたの、瑠璃子。ひとりで大丈夫だって言ってたじゃないか」

そう言われてしまうと、返す言葉もない。それどころか、自分がどれだけ勝手なことを考えていたのか思い知らされた気がした。

甘やかさないで欲しい。そう思いつつも、甘やかされることが当たり前だと思っていたのだ。

「ひとりで大丈夫なんだろ、瑠璃子」

突き放すような元樹の声に、瑠璃子は唇を噛みしめた。その途端、再び雷鳴が響き、瑠璃子は小さな悲鳴を上げて体を丸める。

「ひとりで大丈夫なんだよね？」

頭上から聞こえてくる凄みのある声に、腰に手を当てる仁王立ちで瑠璃子を見下ろす元樹が見える気がした。きっと、眼鏡の奥の目はちっとも笑っていないくせに、口元だけ穏やかに微笑んでいるのだろう。

「どうなの？」

と、聞かれ、瑠璃子はぐっと言葉に詰まった。正直なところ、大丈夫なことなどなにもない。けれど、さっき大丈夫と言ってしまった手前、すぐに素直になることもできなかった。

じっと押し黙っていると、元樹が深々と息を吐き出す。そして呆れたような声を出した。

「……そう、大丈夫みたいだから、俺は帰るよ？ まあ、電気も明日の朝までには復旧するだろうしね」

じゃあ、と言った元樹が身じろぐ気配を感じ、瑠璃子は考えるよりも先に手を伸ばしていた。指

先に触れたなにか……多分、元樹の服の裾をぎゅっと握る。

「……お兄ちゃん……っ」

「どうしたの？」

降ってくる声に泣きたくなかった。いつも過保護なくせに、本当に甘やかして欲しい時、元樹はこんなふう在意地悪になる。

そう、瑠璃子が素直になるまで、絶対に許してくれないのだ。

「あ、あの……や、やっぱり、怖い」

今、停電中でよかったと、瑠璃子は心底思った。自分がひどく情けない顔をしている自覚がある。意地を張って、それを見透かされて、最後まで意地を張り通すこともできなくて……。情けなさと恥ずかしさで、頬が熱い。

「だから……その……」

「だから、なに？ 俺にして欲しいことがあるなら、はつきりとお願いしなくちゃ。そうじゃないとわからないだろ？」

くすつと笑いを含んだ勝ち誇った声で、元樹が囁く。

——い、意地悪つ、悪魔！ 私がなにを言いたいのかわかっているくせに、この超下S！

と、瑠璃子は心の中で喚いたが、もちろん口にすることはできない。

だって、元樹の言うことはもつともなのだから。なにも言わずに、お願いもせずに自分の望みが叶えられるなんてことが、あるはずもない。言わなくてもわかって欲しいだなんて、これこそが瑠

璃子の甘え以外のなにものでもないのだから。

「……お、にいちゃん」

「うん？」

「お願い……電気がついて、雷かやむまで、一緒にいてくだ」

「うん、わかった」

言い終わる前にあっさりと了承され、肩すかしを食らった気分になった。瑠璃子としては、自分の甘えを反省し、恥を忍んでお願いしたというのに……

ぼかんと口を開けたままの瑠璃子の頭に元樹の手のひらが触れ、撫でられる。

「初めから意地を張らずにそう言えばいいのに。まあ、本気で瑠璃子をひとりにする気はなかったけどね。俺が瑠璃子にそんなひどいことをするはずがないだろう？」

そう言う元樹は、がっちり服の裾を掴んでいた瑠璃子の手をそっと握った。そして隣に腰掛けてくる。触れ合った手のひらが、温かくてほっとして……なんだか悔しい。

「大丈夫だよ、瑠璃子。俺がそばにいるから」

昔から何度も何度も聞かされてきた言葉に、瑠璃子は小さくうなずいた。その言葉はまるで魔法のようだ。元樹に「大丈夫だよ」と言われると、本当にそんな気になる。

事実、まだやまない雷鳴も、暗闇もさつきほど怖くないから不思議だ。恐ろしさでがちがちに固まっていた体から力が抜けていく。そして瑠璃子は、ずっと気になっていたことをやっとなに口にする事ができた。

「お兄ちゃん……その、仕事は大丈夫だったの？」

「ああ、まったく問題ないよ。遅くなるつても、ただの会食なんだから。その気になればいつでも会える相手だからね。雷警報かみなりが出たつて聞いて、いつ瑠璃子から電話がきてもいいように、会食は早々に断つておいたのに……当のお前は電話のひとつも寄越さない」

そう言つて元樹はちつと舌打ちをする。

「泣きついてくるまで放つておこうかとも思つたんだけど、かなり天気が荒れてきたからね。急いで帰つてきたんだ。そうしたら想像以上にブサイクな顔で泣いてるし……。まったく瑠璃子は意地っ張りで困るよ」

——なんだか、D S要素が見え隠れしてるんだけど……

瑠璃子は苦笑いしながら、それでも「ごめんね」と謝つた。どんな言い方をしたつて、元樹が瑠璃子を心配して駆けつけてくれたことには変わらないのだから。

そのおかげでこうして今、雷が鳴つても停電していても、落ち着いていられる。

「……ありがとう。お兄ちゃん」

そう答えると、一瞬の間を置いてから、元樹は妙に素そ気けない声を出した。

「別に」

真つ暗闇の中、元樹がどんな顔でそう言つているのか、瑠璃子には知りようもない。けれど、実際に見なくなつて長い付き合いで、彼の表情は容易たやすく想像できた。きつと、ちよつとだけ照れくさそうにしているのだ。

——素直じゃないのはお互い様だよ。

と、瑠璃子はくすつと笑つた。そしてはたと、一番重要な事実を、それはもう突然に思い出したのだつた。そう、見過ごしてはいけない事実を。

「……お兄ちゃん」

「なに？」

「ねえ、お兄ちゃんつて、どうやつて私の部屋に入つてきたの？」
びたり、と元樹の気配が固まつた。

——嫌な予感がする。

「お兄ちゃん？」

「合鍵を持っているからね、それで入つてきたよ」

元樹はさも『なんでもないこと』のようにさらりと云つてのけたが、それが『なんでもないこと』であるはずがない。

「あ、合鍵!? そんなもの持っていたの？ いつから!？」

合鍵の存在そのものを知らなかつた瑠璃子は、手探りで元樹の胸ぐらを掴むと、がくがくとその体を揺すつた。

「うーん……瑠璃子がここに越してきた時から？」

元樹はぼそつとんでもないことを言つた。

「ここに越してきた時……つて、三年も前から？」

「……まあ、そうなるかな。ほら、俺には監督責任があるからね。言っておくけど、今日まで一度だってそれを使ってこの部屋に入ったことなんてないよ」

——なんだか、頭痛くなってきた……

瑠璃子は元樹の胸ぐらを掴んでいた手を離すと、今度は自分の頭を抱え込んだ。きつとなにを言ったところで、『俺は瑠璃子のことを頼まれているんだ』とか、『俺には瑠璃子に対する責任があるんだ』とか言って、黙って合鍵を持っていたことは正当化されてしまうのだろう。

これ以上なにを言っても無駄な気がして、瑠璃子はダメ元でぼそりと呟いた。

「……お兄ちゃん。とりあえず、鍵、返してくれる？」

「ああ、いいよ」

予想外の返事だ。更に元樹は、瑠璃子の手のひらに鍵を握らせてくる。あまりにもあつさりとした返却に、騙だまされているのではないかと疑ってしまうのは仕方ないことだろう。

「……これ、本物？」

「当たり前だろ？ 疑うんだったら、電気が復旧したら使ってみるといい。瑠璃子は俺が信用できないとでも？」

明らかにむっとした声色に、瑠璃子は肩を竦すくめた。三年も黙って合鍵を持っていた人間を、どう信用したらいいのだろうか……。言わないけれど。

「だって、あつさり返してくれると思わなかったんだもん」

「別にひとつくらい構わないさ。あとふたつあるからね」

「……ああ、そういうことなのね」

ここは怒っていいところだと瑠璃子は思ったのだが、思いとは裏腹に、ふっと噴き出してしまった。

——なんだか、お兄ちゃんらしいと言えば、お兄ちゃんらしいか。

そう思ったら、怒る気にもなれなくなるから不思議だ。なんでもかんでも笑って許せるわけではないのだけれど、瑠璃子は元樹が合鍵を悪用していないことを、ちゃんとわかっている。それくらいの信頼は、元樹に対して持っているから。

くすくす笑っている瑠璃子につられたように、ふっと隣から笑った気配がした。

「残りの鍵は俺の部屋のどこかにあるから、いつでも探すといい。見つければ、返してあげるから」

「いいよ、だってお兄ちゃん、絶対に私には見つけれないところに隠してあるんでしょ？」

「……さあ、どうだろうね？」

さつきよりもだいぶ遠ざかりはしたが、まだ振動を感じる近さで雷鳴が響き、元樹は再び瑠璃子の手を握りしめてくる。

その温ぬくもりに……元樹の手のひらから伝わってくる温度に、瑠璃子はやつぱりほっとした。

シスコンの兄のようであり、頑固親父のようでもあり、大事な幼なじみ。血の繋つながりはなくとも、兄妹のような関係。

そんな関係が、この先もずっと続いてくのだと、瑠璃子は信じて疑わなかった。

二 豹変する幼なじみ

肩より長い黒髪をまとめ上げ、ほんのりとピンク色が入った白衣に身を包んだ瑠璃子は、道具の準備を終え、続いてカルテの準備に取りかかっていた。

白を基調とした院内は常にクラシック音楽が流れ、きれいに花が飾ってある。

今日の予約も多いなあ……。などと考えながら作業をしていると、背中をぽんと叩かれた。

「瑠璃ちゃんおはよう。今日も予約しっかり入ってる？」

「真子先生、おはようございます。はい、今日もそれはもう、目が回りそうなほど予約でびっしりですよ」

陣内審美歯科クリニックは、真子の他にもうひとり女性の歯科医師がいるが、それでも真子の仕事量と言ったら、凄まじいものがある。働き過ぎな真子を心配して、そんなに働いていたら体を壊しますよ、と声をかけようと思ったのだが……

「よっしゃ！ 本日も頑張りますかっ。瑠璃ちゃん、予約は入るだけ入れてよね。うふふ、それがぜーんぶ収入に繋がるんだから。ばんばん稼ぐわよー！」

本気で真子の心配をしていたのだが、当の本人はまったくこたえていないらしい……。というか、ますますやる気になっているようだ。

真子は収入云々とってはいるが、瑠璃子は彼女がプライドを持つて仕事に臨んでいることを知っている。だからこそ、このクリニックは繁盛しているのだろう。

「わかりました。がながん予約入れますから、真子先生も倒れないでくださいよ」

心配半分でそう言うと、真子は「大丈夫よ」とからから笑った。そして、急になにかを思い出したように、胸の前でパンと手を叩く。

「そうだ、瑠璃ちゃん」

そう言つて真子は、瑠璃子が作業しているデスクに腕をついて身を乗り出してくる。

前屈みになった姿勢のせいと、豊富な胸の谷間がちらりと見えて、同性なのにドキッとしてしまう。無意識に自分の胸に手を当て、真子とのボリュームの差に神様を呪いたくなった。

「ねえ、この前会った笹井君、覚えてる？」

女としての格差に打ちのめされていた瑠璃子は、真子の口から出た名前に首を傾げた。そして必死で記憶をフル回転させる。

「笹井さん？」

笹井さん、笹井さん、笹井さん……。と、何度も頭の中で繰り返し、そしてはっと思い出す。

「ああ、もしかしてあの雷のひどかった日に、真子先生の旦那さんの車に乗っていた……」

「そうそう、旦那の部下の笹井君！」

名前は思い出せたものの、ぼんやりとしか思い浮かばない。そういえば、爽やかそうな人だった気がする……。程度の記憶しかない。